

—《書評》—

岡崎雄児著 新評論

『歌で革命に挑んだ男——
中国国歌作曲者・聶耳と日本』

(湘南日本中国友好協会顧問) 小松 碧

聶耳について、多く方は中国国歌を作曲した音楽家ということで認識されていると思う。実は北京オリンピックで使われたあの「金蛇狂舞」という賑やかな民族楽曲も彼が編曲して改めて世に出たものだ。

聶耳は1912年に雲南昆明で生まれ、上海に出て幾多の名曲を作り映画界で活躍、日本に亡命中の1935年若くして湘南藤沢の海で亡くなった。享年23歳。亡くなる年、最後に作曲したのが映画『風雲児女』の主題歌「義勇軍行進曲」で、後に中国国歌となった。＜人民の音楽家＞と言われる所以でもある。本書名も、著者が前書きで「聶耳が中国革命に身を投じる人々の心を歌曲で支えたことから母国では＜歌を武器に中国を変えた天才＞と称えられている」と書いているが、ここから来ていると思われる。

筆者は研究者ではない。長年、聶耳を通して友好提携した藤沢と昆明の市民を繋ぐ仕事をし、聶耳を身近に感じてきた。そうした場所に身を置くものとして書きたいと思う。

日本における聶耳研究——情報の量的拡大

筆者の知る限り聶耳の生涯を描いた研究者は岩崎富久男、齊藤孝治、そして岡崎雄児の3氏と思われる。(以下敬称を省略) 知見に偏りがあり、失礼があればお許しいただきたい。

岩崎富久男は中国文学者で明治大学名誉教授。湘南在住。国交回復直後の1973年、当時は日本人として入手可能な限られた資料を駆使して『明治大学教養論集』に「聶耳小伝：中国国歌作曲者の生涯」を書いた。私は氏の抜き刷りから初めて聶耳の生涯の一片を知ることができた。

齊藤孝治は新聞出身のジャーナリスト。1999年に『聶耳——閃光の生涯』を刊行している。

当時はすでに1985年に没後50周年を記念して文化芸術出版社・人民音楽出版社から『聶耳全集』(上巻：楽譜、付録：聶耳作品のカセットテープ、下巻：文字編)が刊行されており、特に文字編には聶耳が書いた原稿・書簡・日記と写真が収められ、国外の研究者にとっては初めて直に触れる生の聶耳だったと思われる。

これに先立ち1982年には聶耳の次兄・聶叙倫が新蕾出版社(天津)から『少年時代的聶耳』を出版。家庭での聶耳が書かれていて面白い。

さらに1992年には雲南出身の王懿之による『聶耳伝』が上海音楽出版社から出版された。

齊藤はこうした状況のもと、親族をも直接取材、当時の詳細な時代状況の解説とともに丁寧に聶耳の生き様を追っている。しかしすでに絶版と聞く。

この間、聶耳が亡くなった藤沢では聶耳記念碑保存会から、『聶耳全集』の一部と日記の日本滞在部分を前出の岩崎が訳し1989年に『聶耳物語』として、また『少年時代的聶耳』は1984年に山本章訳で『少年時代の聶耳』として出版されていることも付記しておきたい。

そして、本書の著者、岡崎雄児である。彼も湘南在住、以前から聶耳について小論を数編書いている。しかしこの本はその集大成と言うより、それが契機となってその延長線上で完成させたように思われる。著者も後書きで当初聶耳誕生100周年の2012年中に出版するつもりであったが、遅れたことが、却って幸いしたことを書いている。

というのは中国では聶耳生誕100年を期して「聶耳百年」の活動が大々的に行われ、その一環として2012年に文化芸術出版社から増訂版『聶耳全集』(上巻：音楽編、付録：聶耳作品のCD、中巻：文字篇、下巻：資料編)が刊行された。特に新たに加わった資料編には多くの研究論文や新資料が収められている。これに収められなかったものも

続々出版された。また同年末には親族の手で長城出版社から多くの未公開写真も収めた写真集『聶耳百年』も出版された。その他聶耳関連の著作が多く出版されている。

3氏ともに新旧『聶耳全集』の編集にあたった延向生や聶耳の原籍地・玉溪での聶耳研究の第一人者・崎松（劉本学）等と親交を結んでいる。

しかし1973年の岩崎、99年の齊藤、2015年の岡崎と見てくると基とした資料量は雲泥の差、飛躍的に増えている。しかしその一方で同時代を生きた証人は少なくなりつつある。昨年が没後80年、聶耳を直接知る人は81歳以上。聶耳が波間に消える寸前まで一緒に遊んでいたという松崎厚（当時9歳）も昨年他界した。2012年に聶家の人々が来日した際、齊藤の手配で彼に会い聶耳の最期の様子を聞くことができた。貴重な機会だった。膨大な資料、残された同時代人への取材から得られた成果、それらを活かして新しい聶耳像を一冊の本として世に送り出すにはまさに時宜を得た出版だったと言える。

そしてさらに嬉しいことには、本書には細かく注が振られ、出典の頁まで示されていることである。後塵を拝する身にとっても有り難い。

人間・聶耳を描く——情報の質的向上

さらに大きいのが質的な向上だ。

中国も時代が変わりつつある。著者も後書きの中で書いているが、「改革開放政策は歴史研究、人物研究にもおよび、……聶耳についてもその実像を見つめ直す環境が整ったのである。その結果、新資料の発見や新解釈が積極的になされるようになってきた」。

もちろん本書には聶耳の生涯、その思想性や音楽性がいかにして育まれたかも含めて、時代情況とともに克明に描かれている。著者はその上で前書きで「聶耳は長い間、＜革命音楽家＞＜人民の音楽家＞として聖人視されてきた。だが近年、新

たな研究によって＜聖人＞の呪縛から解放された。人間味のある真の聶耳像が明らかになりつつある。小著ではそうした研究成果の検討や中国の研究者との交流を通して得た知見を踏まえ、その死をめぐる＜謎＞を検証するとともに、虚飾も誇張もない等身大の聶耳の実像を書くことをめざした」と宣言している。

死の真相については時代が時代だけに複雑だ。1935年と言えば廬溝橋事件の前々年、日本の侵攻が露骨になりつつあった時代である。上海の映画界にあって仲間が続々と捕まるのを見て聶耳は日本へ逃れた。最後の作品「義勇軍行進曲」が入った抗日映画『風雲児女』が公開された時には聶耳はすでに日本にあり、その敵国日本で3ヶ月後に溺死した。時代故に遺体の小さな情報も憶測を呼ぶ。謀殺か事故か。謀殺でも不思議ではない時代であった。一旦は落ち着しつつも、建国後昆明の聶耳墓が移設再建された際、郭沫若が碑文を書いたが、その最後は「不幸而死于敵国、為憾無極。其何以致溺之由、至今犹未能明焉（不幸にして敵国で死んだのは遺憾の極みであり、溺れた原因はいまなお明らかでない）」という曖昧な言葉で結ばれている。これもまた時代だ。そして国交回復時、さらには昆明と藤沢が友好提携すると昆明側からこの部分を問題視する意見が出てくる。これらを様々な角度から検証し、時代情況も合わせて考察している。

聶耳はどんな青年だったか。例えば昆明時代の恋の行方は？ 似た境遇に育った袁春暉と交際していた。教員の父を早くに亡くし、母親の手ひとつで育てられた＜東陸（現雲南大学）の華＞。音楽の仲間でもあった。聶耳像を壊さないためにか今までは聶耳が昆明を離れてからはあまり触れられることはなかった。上海時代女優たちに囲まれて華やかだった聶耳。雲南に残された袁春暉の苦悩は？ 結婚は？ 聶耳の心は？ どこでどう擦れ違ってしまったのか？ 本来なら貴重な資料で

あるはずの聶耳が彼女に書いた100通あまりの手紙は日本軍による昆明空爆で焼けてしまっている。しかし著者はそれらのことを、聶耳の日記、そして2012年の全集にも間に合わなかった新資料などを手がかりに丹念に繙いていく。

本書を読んで思うのは聶耳は非常に真面目で、自分に素直な青年だったと言うことだ。昆明時代、正しくないと思うことには全力で立ち向かった。時に得意とする音楽を使って。後に袁春暉が手記に書いたとあるように、彼はすでに昆明時代から「音楽を政治に役立てるのだ」と言っていた。そして上海時代には素晴らしい仲間たちに恵まれてその才能が開花した。ただ、今まで聶耳の革命音楽家への道を決定づけるエピソードにも使われてきた「黒天使」事件、聶耳がバイオリニストとして初めて採用されたレビュー団「明月歌舞団」の団長であった黎錦暉を軟弱だ!と「黒天使」というペンネームで批判した事件については著者は新たな見解を出している。

こうして見ると、聶耳は決して堅い意志で武装した革命音楽家などではなく、真面目で素直で謙虚な青年だった。才能はあったが音楽の専門教育を受けられた訳ではない。それを深く自覚しつつ、短い上海時代に42曲もの作品を作った。その音楽が時代の中で人々に歓迎され、多くが歌い継がれた。しかも最後の1曲はやがて国歌になり、一世紀近くを経た現在、人民解放軍軍楽隊の伴奏で斉唱されている。青年聶耳にとっては予想だになかったことであろう。

このように覆されていく実像は今の時代の流れと考え合わせればある意味なるほどと思わせるものでもある。

そして今

本書の最後にもあるように近年続々と中国国内の関連史跡も整備されつつある。昆明では生家が、原籍地玉溪では音楽広場、記念館が整備され、活

躍した上海では上海電通影業公司跡は国歌記念展示館になっている。さらに聯華影業公司跡は上海電影博物館に、一時期働いたレコード会社・百代唱片公司はそのままレストランになっている。この本を手回られるのも一興であろう。

一方日本では、聶耳が亡くなった藤沢市鵠沼海岸に戦後聶耳記念碑が作られ、台風で流されるも再建、整備され、毎年命日の7月17日には碑前祭が行われている。81年には誕生の地・昆明と逝去の地・藤沢は友好提携している。

著者の思いは終章で語られている。少し長くなるが引用する。「(日本では)戦後は総じて、1941年以降の太平洋戦争の被害を重視する一方、日中戦争の加害の事実を直視してこなかった。そのような歴史認識の齟齬が、両国の関係に亀裂を走らせる一因となっている。日本に住むわれわれにとって、「義勇軍行進曲」の成り立ちとその作曲家の生涯を辿ることは、単に中国国歌の来歴を知るにとどまらず、彼我の歴史認識の違いを理解し、その溝を埋めることの大切さをわれわれに痛感させる」さらに「現在、日中の政治的関係は、国交回復以来最悪の状況にあると言われる。聶耳の生きた時代も同様であった……にもかかわらず、聶耳が日本、とりわけ藤沢の友人宅で過ごした数日間は、彼の生涯の中でも最もくつろいだ日々だったのではないか。これは私たちにとってせめてもの慰めである。このことはまた、国同士の関係がいかに厳しくとも、市民同士の交流はそれとは別に成立しうるし、そこにこそ希望が見出されることを物語っている」。

国交回復以前から長年、中国との貿易を促進する目的で設立された日本国際貿易促進協会です仕事をしてきた著者ならではの言葉である。私たちへのメッセージにも思える。この言葉をしっかりと受け止め心を新たに前に進みたい。

(2015年7月刊, 279ページ, 本体2,800円+税)